

幕末明治の写真師列伝 第三回 下岡蓮杖 その二

下岡蓮杖の初期の逸話については、不確かなことも多いのだが、山口才一郎『写真事歴』（『旧幕府』（第参卷第七号、明治24年））を元にして続けて書けば、久之助（下岡蓮杖）の父・桜田与惣右衛門はその頃浦賀船改役方御番所に勤務していた。遠い長崎まで行かなくとも、浦賀にて外国船が来航するのを待ち、外国人から写真術を学ぶことができるのではとも、久之助は考えたのであろう。本来は父・桜田与惣右衛門に許しを乞い、父の世話になることも考えたが、下田から絵師を志しておきながら絵師を辞めてしまったこともあり、久之助は浦賀まで来たものの、はたと困ってしまった。そこで考えた末に伯父の臼井正蔵を頼ることとし、この伯父の世話で浦賀奉行所の足軽の一人として勤めることとなった。浦賀平根台場での御番所警衛係（港の監視役）の仕事であった。

弘化3年（1846）5月27日、とうとう浦賀沖合にジェームス・ビッドル（James Biddle, 1783-1848）提督率いる米国東印度艦隊の帆船軍艦が2隻やってきた。ビッドルの旗艦コロンバス号とビンセンス号である。世にいう浦賀事件である。この時の記録は、弘化雑記第九冊（内閣文庫所蔵）として、管轄窓口である浦賀奉行の対応及び江戸湾を警備する近隣諸大名の注進・報告、浦賀与力の私信、船問屋・名主など民間人の文書、風聞、幕府決定機関である老中から奉行や諸大名に対する指示等が数多く収録されている。

久之助は何とか外国人に近づきたいと考えていたが、自分の身分でそのようなことをして、それが露見したらどんな裁きを受けるかとも恐れていた。ところがである、浦賀奉行所から呼び出しを受け、浦賀奉行・大久保因幡守より、「桜田久之助こと狩野董圓、幕府の命により、この度来航した軍艦の様子を全て絵図として書き取るように」と申し付けられた。

この時の話は、後の明治32年（1899）8月2日に、東京上野にある東照宮にて行われた幕府史談会の席上で、下岡蓮杖が実話として話をしている。しかしながら、この時は久之助は外国人から写真術を学ぶことはできなかったのである。

浦賀にはその後嘉永2年（1849）5月に英国艦隊が入港するなどあったが、久之助が写真術に関することを学ぶことはできなかった。嘉永6年（1853）2月2日には相模湾大地震。この年、久之助は休暇を取って江戸神田の木工師



マシュー・カルブレイス・ペリー
（日本カメラ博物館所蔵）

・啄文齋を訪ね、自分の身の丈より高く大きい杖を作って貰おうと依頼した。この時に製作した杖は、五尺三寸、唐桑の木で蓮根の形を現した杖で、杖の中ほどに「嘉永六癸丑年如月 應董圓畫伯需製造 啄文齋」と刻まれている。これが久之助が「杖は師匠であるから自分より大きくなければならぬ」とした杖である。

この杖を持ってやはり写真術を学びに長崎に行こうと決意した久之助は旅に出る。そうして相州相模までいったところで、ペリー艦隊が浦賀に来たことを知る。

嘉永6年（1853）6月3日、マシュー・カルブレイス・ペリー（Matthew Calbraith Perry, 1794年4月10日 - 1858年3月4日）提督率いる米国東印度艦隊の黒船3船（帆船3隻汽船2隻）が日本に来航したのである。

こうして混乱の浦賀に再び久之助は戻ることにした。真っ黒い煙を吐きながら外輪で動く黒船は、幕府に開国を要求すると、翌年、その回答を求めて再び来ることを幕府に告げて、数日後に去ってゆく。やはり浦賀で機会を待とうと久之助は考えるのであった。（次号へ続く）

（森重和雄）